



414
A 770

南征秘談

目次

- 一暹國外務大臣デーヴァーウオングシー親王殿下
トノ談話(三回)
- 一前外務大臣クロマタ公閣下トノ談話
- 一前摂政秘書官英國人ヒックス氏トノ談話
- 一陸軍次官デージョー氏トノ談話
- 一文部大臣バスカラフオングシー公閣下ノ談話
- 一外務顧問白耳義人ジヤクミン氏トノ談話
- 一速ニ日暹通商條約ヲ訂結スヘキ六理由

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

全三行

南洋秘談 (三) 暹羅國外務大臣秘書官ヨリノ書狀到來ニ
 于テ其約東ノ時間ニ全省ニ到レリ
 之ヨリ前日本駐在ノ澳國代理公使伯爵ユ
 ンドーホフ氏ヨリノ紹介狀ヲ差出シ置ケリ
 殊ニ一言ス可キハ余ハ日本ノ政府ト毫末
 毛關係ナキヲ示スカ為メニ日本政府ノ現
 当否者ハ勿論曾テ日本政府ニ關係アリシ

南洋秘談

大正十一年四月

南洋秘談 (明治二十七年六月上海ニ於テ認ル)

暹羅國外務大臣デーヴァーウオングシ親王殿下ト

ノ談話

暹羅國首府滯在中明治二十七年四月十三

日全國外務大臣秘書官ヨリノ書狀到來ニ

于テ其約東ニ於テ面會シタレトノ通

知ニ接シテ其約束ノ時間ニ全省ニ到レリ

之ヨリ前日本駐在ノ澳國代理公使伯爵ユ

ンドーホフ氏ヨリノ紹介狀ヲ差出シ置ケリ

殊ニ一言ス可キハ余ハ日本ノ政府ト毫末

毛關係ナキヲ示スカ為メニ日本政府ノ現

當否者ハ勿論曾テ日本政府ニ關係アリシ

人ヨリノ紹介ハ一モ携ヘサリシ蓋シ此談
話ニシテ若シ兩國間ノ交情ニ不良ノ結果
ヲ来スカ如キ事アルカ或ハ彼等ヲシテ余
カ政府ト關係アルヲ疑ハシメ為メニ後來
兩國間ノ交際ニ妨害ヲ興フルモノアルマ
モ計ル可ラサルノ恐アリシカ為ニ殊ニ此
一事ニ於テ深ク注意ヲ加ヘタルナリ
外務大臣曰澳國公使ヨリノ紹介状ハ正ニ落手
シタリ且ツ今日貴下ト相見ルノ榮ヲ得ルハ
大ニ某カ喜悦ニ堪ヘサル所ナリ
余曰拙者ニ於テモ今日殿下ニ拜謁ヲ得タルハ
大ニ光榮トスル所ナリ且ツ澳國公使ヨリモ

殿下ニ面謁ノ時ニハ殿下ノ起居ヲ問フ可キ
依頼アリシ澳國公使ハ拙者カ帰朝以來殊ニ
親シク交際セルノ朋友ナリ
外(外ハ外務大臣ナリ以下之ニ倣フ)曰ク先般澳
國ノ皇太子殿下カ敎國ニ来遊アラセラル、
為メ特ニ澳國公使ノ来遊アリ敎國ニ於テモ
十分ノ厚待ヲサントテ其用意ニ怠ラサリ
シカ遂ニ中途議變リテ来遊アラセラレサリ
シハ實ニ某カ遺憾トスル所ナリ
余曰甚々失敬ノ至リナレ此書(東方策ノ原書)
ハ拙者カ嘗テ英國在留中著述セシモノナレ
ハ若シ殿下間暇ヲ得テ一覽セラル、ノ榮ヲ

賜ハ、更ニ感謝ニ堪ヘサル所ナリ

外曰嘗テ貴者ノコトハ傳聞スル所ナリシカ今

日貴下ノ惠贈ニ遭ヒ親シク其書ヲ閱スルノ

幸榮ヲ得ル大ニ欣喜スル所ナリ聞ク貴下ハ

英國ケンブリッジ大学ニ於テ教育ヲ受ケラレ

タリト信ナルカ

余曰然リ——此時給事茶ヲ捧シテ来ル氏ハ之

ヲ機トシテ口ヲ開キ

外曰ク敝國ニ於テ吃茶ノ法ハ貴國ト毫モ異ナ

ル所ナシ請フ一杯ヲ吃セヨ

外勢大臣ノ此一言ハ實ニ外交上用詔ノ慎

到ナルモノニシテ此一言ハ即チ我等兩人

余曰ノ談話ヲシテ兩國間外交上ノ談話ニ一歩

ヲ進ムルノ機會ヲ得セシメタリ若シ此時

當リテ此一言ナカリセハ彼我ノ談話ハ

外交上ニ及ブノ機會ナク突然ニ外交ノ事

ニ移ルヲ得サリシナリ

余曰貴國ト我國トハ歴史上古未親密ノ關係ヲ

リシニ相違ナシ然ルニ當時敝國人カ貴國ノ

事情ニ深ク通スルモノナキハ實ニ拙者ノ慚

愧ニ堪ヘサル所ナリ然ルニ昨年貴國カ佛國

ト戦端ヲ開カルニ當リ敝國民モ始メテ永

日ノ眠ヲ醒シ貴國ニ向テ注意ヲ惹クニ至レ

リ殊ニ拙者カ貴下ニ告ケテ一層ノ愉快ヲ覺

ムルモノハ貴國ト佛國トノ葛藤事件ニ就テハ
敝國民ノ多分ハ貴國ニ同情ヲ表スル甚シク
殊ニ佛國カ貴國ニ對スル不正ノ所為不理
ノ請求ニ至リテハ一人ノ貴國ノ為メニ彼ヲ
惡シ彼ヲ怒ラサルモノナシ——此時大臣喜
色满面ニ顯ル

外曰貴國人民ノ義心ハ實ニ余ヲシテ感激ニ禁
ヘサラシムルニ足ル實ニ歐洲諸國ニ對シ我
東洋ノ各國カ互ニ其心情ヲ知悉シ共ニ一致
協力スルハ今日最急務ニアラサルナカラシ
マ

余曰殿下ノ言實ニ然リ而シテ今日此友愛ノ情

ヲ保持シ且ツ後來ニ於テ益親交ニシテ兩國
間ニ錯誤起ラシメス苦樂相共ニシ利害相均
シカラシメント欲セハ必ス兩國間ニ條約ヲ
訂結セサル可カラズ而シテ速ニ此條約ヲ訂
結スルハ今日ノ最急務ナラスヤ貴國政府カ
敝國ト條約ヲ訂結スル事ニ就キ貴國政府ノ贊
同セラル、又否ヲ伺フヲ得ハ實ニ拙者ノ幸
福ナリ

外曰其事ニ就テハ決シテ不同意ナルノ理ナシ
又已ニ貴國トハ友國タルノ條約ヲ有セリ
余曰然リ友國タルノ宣言書ノ如クモ、ハ已ニ
兩國間ニ存セリ然レモ眞個ノ修好通商ノ條

約ナルモノニ至リテハ未タ之アラズ現ニ敎
國ノ公使館モ未タ貴國ニ設ケアラサルニア
ラスヤ

外曰通商條約ヲ兩國間ニ訂結シ貴國ノ公使館
ヲ当府ニ見ルニ至ルハ實ニ某ノ渴望スル所
ナリ故ニ此件ニ就テハ余ハ十分ノ便宜ヲ貴
國ニ與フヘシ頃日貴國齊藤領事殖民地ヲ相
スル為メニ未遲アリシニ付キ某ハ十分ノ便
宜ヲ彼ニ與ヘタリ

余曰拙者ハ貴政府カ敎國殖民事業ヲ獎勵セラ
ルハトノ由ヲ聞テ深ク貴國ノ厚誼ニ感セリ
然レモ今日歐洲人ニ與ヘタル居住地外ニ居

住スルノ權ヲ敎國人民ニ與ヘラルヲ得ル
ヤ

外曰然リ敎國到ル処何ノ地ヲ論セズ勝手ニ居

住スルヲ許スヘシ(所謂内地雜居ヲ許スノ
意ナリ)敎國ハ土地ノ廣大ナル割合ニハ人口

多カラズ殊ニ農民至テ少ニ故ニ貴國人ヲ容
ルノ餘地十分ナリ

余曰然ラハ貴政府ハ歐洲諸國ト訂結セシ現條
約(今條約國ノ人民ハ盤谷府城内ニ於テ八十
年間其地ニ在住スルカ或ハ政府特別ノ許可
ヲ得ルニアラサレハ土地ヲ所有スルヲ得ス
域外ハ城壁ヨリ四周二十四基(一基ハ我九

町一間ニ当ル以内ノ地ニ限レリニ於テ制限
サレタル区域内或ハ區域外ニ於テ敎國人民ニ
土地ヲ所有スル權ヲ與ヘラレヘキヤ
外曰然リ區域外ト雖モ日本人ニハ土地ヲ買求
スルコトヲ許ス可シ(日本人ニハ暹羅全國ニ於
テ土地所有ノ權ヲ與フルナリ)
余曰現今支那人モ亦其區域外ニ居住セルヤ
外曰然リ

余曰支那人ハ貴國ノ法權ノ下ニ在リヤ
余カ此問題ヨ於ニタル理由ハ日本人ニハ
讓與スル所甚ク寛大ナルニ一驚ヲ吃シタ
レモ尚余ノ此時ニ於テ確メサルヲ得サル

モノハ以上ノ如ク彼カ讓ル所多キニ拘ラ
ス我ニ治外法權ヲ與フルヤ否ヤハ是非ト
モ確メサルヲ得サルノ要點ナリトス然ル
ニ此治外法權ナルモノハ一等我ヨリ劣國
ニ對スルノ條約ニシテ余ハ此一事ヲ問フ
ニ躊躇セリ然レモ之ヲ問ハサレハ此談話
ノ價值ナキヲ以テ遂ニ一問ヲナスコトニ決
セリ而シテ此一問ニシテ若シ支那人ト同
様ノ取扱ヲナスト返答ヲ得ハ其後ノ談話
ノ進路ニ妨害ヲ與フル必カラス甚ク面倒
ヲ感スルヲ以テ是非トモ支那人ト同クセ
ス必ス歐洲人ト同等ニスルトノ返答ヲ得

サル可カス故ニ左ノ如キ一問ヲナセリ
余曰貴政府ハ敝国人民ヲ歐洲諸條約国人民ト
同様ニ取扱ハル、ヤ或ハ無條約国ハ支那人
ノ如ク取扱ハル、ヤ又我等日本国民ハ貴国
ノ法權ノ下ニ立タサルヘカラサルカ——此
一問ハ此談話中最要ノ点ニシテ彼ニ對シテ
ハ最モ氣ノ毒ノ次第ナレハ自身ニ於テモ已
ニ問ヲ發シナカ^誠返答如何ヲ危メリ
外曰此點ヲ定ムルニ最モ便方ハ貴国政府ニ於
テ貴国人民ノ利害得失ヲ管理スルノ事務官
ヲ派遣セラル、ヲ宜シトス
余曰貿易事務官ノ謂カ

外曰然ラス領事若クハ公使ノ謂ナリ
余曰然ラハ暹羅国ニ於テ貴国ハ貴国在住ノ敝
国臣民ニ對シテ治外法權ヲ讓與スルモノト
解釋シ得ルヤ
外曰我国政府ハ貴国カ敝国ニ於テ治外法權ヲ
有スルニハ異議ナシ殊ニ今日東亞細亞諸国
カ互ニ相信用ニ相結合スルノ状ヲ歐洲人ニ
示スノ必要ヲ感スルノ際ナレハ其交情ヲ温
ムル為メニハ多少讓與ノ度ヲ異ニスルモ意
トナス所ニアラス殊ニ敝国ハ國小ニシテ一
国ヲ以テ諸歐洲ニ對スル力ナシ是レ多少ノ
讓與ヲ意トセス我東方諸国カ互ニ相讓り相

信之テ歐洲諸国ヲシテ其支愛結合ノ情ヲ見
セシメント欲スル所以ナリ——蓋シ條約ニ
於テ定メタル一區域内ニ於テ自国ノ臣民ニ
對シ其自国ノ法權ヲ保ツハ歐洲諸国カ東洋
諸国ニ對シテ常ニ慣行シタル筆法ナレモ此
條約ノ如ク全国ニ雜居シタル臣民ニ對シテ
自国ノ法律ヲ施行シ得ルハ常例ニアラス
余曰實ニ然リ——更ニ詔ヲ継テ曰ク殿下今日
ノ談話ハ暹羅国外務大臣ノ言トシテ救国ニ
三ノ主ナル有力家ニ洩スモ不可ナル所ナキ
カ
外曰某ハ外務大臣ノ言トシテ責任ヲ負フモ夫

ニテ甚シカラス
此時ニ至リテ外務大臣トノ談話ハ急迫
ノ点ニ達セリ而シテ自ラ謂ラク以テ上ノ如
ク已ニ確メタリト虽此一回ノ談話ニ於テ
ハ安心ニ難ク且ツ暹羅人ノ言ナレハ常ニ
變動ニ易ク再三確メ置クニアラサレハ後
日ニ至リテ之ヲ変スルモ知ル可ラス然ル
ニ今重子テ之ヲ確メント欲スレハ彼ニ對
シテ礼ヲ失ヒ為メニ彼ノ感情ヲ害スルモ
知ル可カラスト勅考シ遂ニ話頭ヲ轉シテ
再々左ノ談話ヲナセリ
余曰殿下嘗テ日本ニ來遊アラセラレシヤ

外曰千八百八十七年ニ英國女皇陛下即位五十
年ノ大典ヲ祝スル為メニ英國ニ赴キ第一ニ
伯林ニ於テ小松宮殿下ニ面謁セリ其當時同
殿下トハ必ス敵國ニ未遊アラントテ約シ其
後相分レテ米國ヲ經帰國ノ途次貴國ニ立寄
リ皇帝陛下ヨリ非常ノ厚待ヲ辱フセリ其後
帰國シテ再シ小松宮殿下ノ未遊アラセラル
、ヲ迎ヘタリ當時ハ伊藤伯貴國ノ總理大臣
タリシカ今日モ亦再シ同氏カ總理大臣ノ任
ニアルニアラスヤ
余曰然リ昨年ノ八月頃ナリシト覺フ拙者カ西
比利亞朝鮮ノ漫遊ヲ終テ帰國ノ後東洋ノ形

勢上貴國トハ必ス條約ヲ訂結スヘキ旨ヲ同
伯ニ勸告セリ其際同伯モ別ニ異議アラサリ
ニ然ルニ亦實際ニ履行スル事ヲナサス内治
ノ整理ニ心腦ヲ注ケルモノ、如シ然レモ余
ニ於テハ必ス貴國ト通商條約ヲ訂結ニ敵國
、公使館ヲ当府ニ設ルノ必要ヲ深ク感セリ
外曰凡世人ハ深ク知ラサレモ貴國ト敵國トハ
古来密接ノ關係ヲ有セルモノト見ヘ前ノ英
國公使サトー氏(氏ハ前ニ我邦英國公使館ニ
書記官トシテ以シク駐在シ善ク我邦語ニ熟
通スルノ人)ト談話中兩國ノ姓氏其他物名ニ
於テ大ニ類似スルモノ多キヲ發見シタリ之

ヲ以テ之ヲ見レハ今日敵国人民ノ幾分カハ
往時在任ノ貴国人民ノ子孫ナルヤモ知レ可
カラス免モ爾兩國間ノ通商モ漸々開クルニ
至ラン蓋シ貴国ハ「チー」(艦材ノ名)ヲ要スト
考フレハ同材ヲ貴国ニ輸出スル事ニ就テハ
成ル可ク便宜ヲ興フヘシ敵国ニ於テハ現ニ
貴国ヨリ「マツ」織物其他裝飾品等ヲ輸入セリ
然ルニ是等ハ皆諸外国商賈ノ手ヲ經テ輸入
セラル、モノニ係リ不便少カラサレハ直接
通商ノ便宜ヲ開キ度シ

余曰此ノ如クシテ通商ノ便開クルニ至ラハ我
東亞細亞諸国ノ交情モ亦從テ密着ノ關係ヲ

有スルニ至ルナラン

外曰支那国モ頃日ニ至リテハ敵国ト對等ノ一
国トシテ交際ヲナサントスルノ傾アルカ如
シ殊ニ英國人ノ後援ヲ以テ支那ノ艦隊先日
未新嘉坡ニ来リ其真意ハ蓋シ佛国ニ對シ
示威運動ヲナスカ為メニ當府ニ入港スルニ
在リシ故ニ當府モ之ヲ厚待セシカ為メニ殊
ニ十分ノ用意ヲナセシカ何ノ為メニカ(佛国
カ之ヲ妨ケタルカ)遂ニ當府ニ来ラサリシ
余曰他日敵国政府カ佛国ノ不正ナル所為ニ反
對スルノ意ヲ表スル為メニ強大ナル艦隊ヲ
貴府ニ送ル策ヲ取ルヲ望ム——此時兩人

暫時言ナク唯然對坐セリ而シテ給事ハ未
テ茶ヲ供セリ時ニ外務大臣ハ余ニ煙草ヲ吃
セシムルヲ勸メラレタレ比余ハ之ヲ辭シ且ツ
詔ヲ改メテ曰ク

サテ最後ニ再ニ殿下ニ確メ置カサルヲ得サル
ノ緊要事件ハ則チ敝國政府カ貴國ニ於テ救
國臣民ニ對スル民事刑事ノ裁判ヲ施行スル
ニ付テ貴政府ハ異議ナキヤ

外曰異議ナシ

余曰此点ハ即チ余ノ最モ確メ置カント欲セシ一
事ナリシ

外曰貴國ハ支那ニ向テモ治外法權ヲ有スルナラン

余曰然リ朝鮮ニ於テモ亦然リ

外曰ジャクミン氏(政府顧問官)来ル十六日貴下ヲ饗食應
スル由話セリ某モ當日其招請ヲ受ク必ス其際
再會ノ榮ヲ得ン

余曰輝々殿下ノ厚情ヲ謝ス再ニ面謁ノ榮ヲ得シト
ラ望ハ殊ニジャクミン氏ノ宴席ニハ必ス拜謁ヲ得ル
ナラン
此談話ヲ終テ主客互ニ一礼ヲ施シテ
分ル

以上列叙シタル談話ノ要点ヲ摘記スレハ右如シ
第一暹羅國ハ我國ト通商條約ヲ訂結スルニ異議ナ
キニシカ却テ進テ之ヲ為サント欲スルノ意向アリ

第二我邦ノ臣民ハ歐米諸條約國ノ居留地及ヒ

居留地外に於て居住ノ自由ヲ得ル事

第三、歐米諸國ト締結セル現條約ニ於て制限セラレタル區域或ハ區域外ニ於て我邦ノ臣民ハ土地所有權ヲ有スル

現今歐米諸條約國ノ臣民ハ總て府内ニ於てハ十年間其土地ニ在住スルカ若シクハ政府特別ノ許可ヲ得ルニテラサレハ土地ヲ所有スルヲ城外ハ城壁ヨリ四周ニ四基(一基ハ我邦九丁ニ間ニ當ル)以内ニ限り土地所有權ヲ有ス

第四、我政府ハ暹羅國在苗ノ我臣民ニ對シテハ居住地内ハ勿論暹羅全國ニ於て亦外法權ヲ有スル事(我邦ハ暹羅國ニ於て亦外法權ヲ享有シ彼レハ我邦

ニ於て該權ヲ有セサル事)

明治二十七年四月十四日再々外務省ニ到リ外務大臣及ヒ諸譯局長ニ面會シ暹羅國ト歐洲諸國トノ條約書ヲ悉皆借入レタリ

明治二十七年四月十六日暹羅國政府顧問官ジャクソン氏宅ノ宴席ニ於て外務大臣トノ談話左ノ如シ
此宴席ニ外務大臣ヲ始メ各種男女ノ集會ナレハ詳細ナル談話スルノ機會ヲ得ス唯其談話ノ一二要點ノミヲ擧ク

余ジャクソン氏ニ謂テ曰ク數日前外務大臣殿下ト

数時間ノ懇話ヲ得殊ニ條約訂結ノ点マテ及(リ)
ジマクミン氏曰ク果シテ然ルカ——次ニ氏ハ外務大臣
ニ伺テ曰ク稍垣君ト日暹兩國條約訂結ノ談
アリト云フ果シテ然ルカ

外曰實ニ然リ

余曰兎モ爾日本國ハ当府ニ領事或ハ公使ヲ置ク
可クノ必要アリト思考ス然ルニ日本齊藤領事即今当
國ニアリ、殿下ニ(外務大臣)当府ニ日本領事館設
置ノ件差ク條約訂結ノ件ヲ申入レシヤ

外曰否々唯日本國ノ移民地ヲ視察セシテ請フ
ノニ故ニ余ハ其目的ニ對スル便宜ヲ與ヘタル
ノニ

余曰歐洲諸國ハ各当地ニ於テ領事館ニ附屬スル監獄著
ク有スルヤ

外曰唯英國領事館之ヲ有スルノニ其他ノ諸國ニ於テ
ハ更ニ之ヲ設クルノ必要ナシ蓋シ一ヶ年間僅ニ一二
事件ヲ生スルニ過キサレハナリ

余曰貴國ニ万国法廷ナルモノアリ如何ナル者ナルヤ

外曰外國人原告ニシテ暹羅人被告タル才判ヲ判決
スル所ナリ

余曰其才判官ハ總テ貴國人ナリヤ

外曰總テ敎國人ナリ

余曰貴國ノ監獄著及才判所ヲ一覽スルヲ得ルヤ

外曰貴下ニ於テ一覽ヲ要セラルニ於テ当方ニ於テ其

手續ヲナシ便宜ヲ興フヘシ

此席ニ男女ノ来賓多ク細密ナル談話ヲ出来サ
リシカ殊更外務大臣ハ日本ノ美ナル由ヲ賞揚
セリ殊ニ我國ノ天然ノ位置ニ就キテハ四周海ヲ
環ラシ他ノ強國ト境ヲ接ヒス徒テ境界ノ争
端等ノ煩ヲ受クルトナヌヲ以テ幾回トナク之ヲ
羨慕スル旨ヲ述ヘタリ暹國々東佛ニ接シ
西英ニ連リ常ニ強國ノ不正ノ壓倒ニ苦ハ様
ヲ想像スルモ實ニ可憐ノ至リナリ此ク外務大臣
カ頻リニ我海島國ヲ羨ムヲ見テ余モ亦無
限ノ感ヲ惹起ヒリ

明治二十七年四月二十三日外務省ニ於テ外務大臣ト第
四回ノ面會ヲナセリ

四月十四日歐洲各國トノ諸條約書借入レ以テ未終
テノ條約書ヲ一讀シテ凡ソ其條約ノ大旨ヲ
見若シ日本ト條約ヲ結フノ場合ニ凡ソ如何ノ
点違入ルヲ得ヘシトノ服案九ヶ条ヲ作り之ヲ
認メテ同日携帶セリ和シテ其腹案ノ原紙ハ
今猶之ヲ保存セリ

余曰明後日貴府ヲ出発ス可キ預定ナレ今日殿下
ニ拜謁スルハ蓋シ今回滯暹中ノ最終ナラン拙者ノ
滯暹中深ク懇待ヲ辱フセシハ厚ク感謝ス所ナリ
外曰貴下ノ滯暹日甚ヲ少キハ余ノ遺憾トスル所ナリ

余曰殿下政勢繁忙ノ際多數ノ時開テ費サレハ大ニ拙者ノ忍ヒサル所ナリ然レモ殿下ト拜別セントスルニ當リテ尚條約ヲ就キテシク殿下ノ意見ヲ確メ置キ度シ

外曰某モ此件ニ就キテハ喜テ貴下ノ請ニ應セン
余曰貴国ト敎国トノ間ニ條約ヲ訂結スルモノト假定シテ……

○第一暹羅国ニ於テ日本国民ニ暹羅国ノ法律ニ違ハサル限リハ如何ナル工業製造ニモ從事スルヲ許可セラルヘキヤ

外曰勿論其義ハ承諾スヘシ
○第二暹羅国ニ於テ日本国民ニ暹羅国各處ニ於

テ自ラ礦山ヲ発見シ及ヒ之ヲ発掘スルノ自由ヲ与ヘラル可キヤ

外曰然リ
○第三暹羅国内地各處ニ於テ日本国民ノ貨物ヲ販賣シ或ハ暹羅國產物ヲ買收スルノ自由ヲ敎国国民ニ与ヘラル可キヤ

外曰然リ然リ

○第四日本国民貨物ノ輸入ニ向テ三分以下ノ税ヲ拂フモ其已上ハ決シテ拂ハサルト此條件ニ就テハ如何
——是レ現今歐洲諸国トノ條約ニ於テ定メタルモノナリ但酒類ハ此限ニアラス
外曰三分以上ノ税ハ決シテ課スルトテ之ニ蓋シ余ハ

自由貿易ハ国家富強ヲ致スノ原因ナルヲ信ス
レハナリ現ニ英國ハ此主義ヲ取りテ彼カ富強ヲ
致シタルニ非スヤ

因ニ誌ス暹羅國貿易歴史上ヨリ之ヲ考察スルニ
此外務大臣ノ主義ハ即チ同國舊来ノ國是ト
ナリ居ルヲ知ルニ足ル十八世紀ノ半ニ於テ支
那人カ賄賂ヲ行ヒ總テノ商業ノ專賣權ヲ同
政府ヨリ得テ其他ノ國民ヲシテ商業ヲ設ルヲ得
サラシメタル際此弊害ヲ除クカ為メニ駐清國英國
公使サージョン・ボーリング氏暹羅國ニ使シテ同國
カ自由貿易ノ主義ヲ取ル可キヲ當時ノ同
國王ニ勸告セリ而シテ千八百五十九年此勸告ニ

依テ条約ヲ訂結シテ如クテ歐洲諸國ト、貿易
ヲ開ケリ故ニ開國ノ始ヨリ自由貿易ノ主
義ハ通商上ノ大本トナレリ

○第五、如何ナル種類ノ株券モ日本國民ニハ其所
有權ヲ与ヘラレ可キヤ

外曰其義ハ許諾スヘシ
此時ヨリテ余ハ談話ヲシテ今一步ヲ進メテ茲
外法權ト土地所有ノ許諾ヲ得タルノ外尚ニ件
ノ緊要ナル条項アリテ之ヲ確メ置カサル可カ
ラス然レハ其談話ノ余リニ急進ニ過キル
ノ恐アリシヲ以テ遂ニ時談頭ヲ他轉セリ
余曰一兩日前貴國旧都ナルアイシヤニ遊ヒ各地ノ

古蹟旧墟ヲ見テ大ニ愉快ヲ感ヒリ殊ニ往時ノ
日本村落ノ所在地ト稱スル処ヲ見テ大ニ今
昔ノ感ニ堪ヘサリシ

外曰日本村落ノ滅亡ニ関シテ其原因ノ何ニ在リカ
又何ノ年代ニ起レルモノナルカ記録ノ以テ徵ス可
キナキハ余ノ大ニ怪ム所ナリ譜ヲニ十八世紀中緒
甸兵ノ来寇ニ遇ヒ旧記モ紛失シ村落ヲモ滅
亡セシモノナラン

余曰最惠國條欵均霑ノ權理ハ敵國ニ与ヘルヤ
外曰然リ歐洲諸國ニ條約上与ヘル所ノ權限ハ拳
ヲ貴國ニ讓ルセシ今敵國カ貴國ト條約ヲ訂
結スルニ当リテ一モ直接ノ利益ヲ希望スル

モノアルニアラス惟フニ貴國ト敵國トハ人種ヲ同フス
ルノミナラス或ハ同族ノ子孫ナルモ知レ可カラサレハ
歐洲人ニ与フル權限ヲ貴國ニ讓ルセシハ理ハ千
萬アル事ナシ

余曰此諸問題ハ即テ今日拙者カ殿下ノ意見ヲ
確メ置カンナリテ希望セシ諸点ナリ

以上六ヶ條ニシテ其他ハ第一回ニ於テ既ニ決
定シタルモノナリ而シテ尚一ノ問題ヲ殘
セリ即チ我國旗ヲ擧ケタル艦船ヲシテ懸谷
府以上ニメナ山河ヲ游ルヲ許可セラレ可キヤ
ト云フニ在リシ(蓋シ現今各國トノ條約ニ
於テハ懸谷府ヲ越ルヲ得ス)而シテ此一條

ハ餘リニ完ヲ求ムルニ過キ利ヲ追フテ飽クナキ
ト歎アラシムラ恐レ遂ニ之ヲ確カスルヲ断念
セリ即チ詔ヲ改メテ

余曰貴國ト敵國トカ條約ヲ訂結スルトハ
敵國ノ全權公使ヲ派遣スルカ或ハ貴國ヨリ全
權公使ヲ派遣セラルカ孰レヲ撰ハルハヤ
外曰貴國ヨリ全權公使ヲ派遣セラレタシ

余曰然ラハ其時ニ當リ詛カ貴國政府ノ代表者
トシテ真談判ノ任ニ當ラルヤ——余カ此問ヲ答シ
タル^真意ハ自ラ謂ラク此國ニ於テ談判委員ノ
主任者ハ必ス此外務大臣ナルト預知シ得ル所ナレ
其他ニ之ニ任セラルモノアリトセハ必ス其人ニモ面會

ニテ其意見ヲモ合セテ即チ置カント決定シタカ
外曰唯余一人ナリ恠モ今日貴國ト談判スルカ如何
人對話ノ間ニ之ヲ訂結スルト得ヘシ決シテ他人
ノ之ヲ助クルトナレ唯余一人ナリ——此ニ至リテ
條約上ニ係ル談判ハ全ク終決セリ

余曰此品ハ實ニ麗造ナルモノナレ凡實ハ其ノ老母
ノ製スル所ニ係ルモノナリ若シ受納セラルニ於
テハ其ノ大ニ光榮トスル所ナリ
外曰實ニ感謝ニ堪ヘス殊ニ此贈物ハ貴令堂ノ手
ニ成レルモノナレハ一層貴重ニテ保存スヘシ實ニ
貴國ハ一般ニ美術ニ長セリ此品ヲ一見シテモ
其一斑ヲ窺フニ足ル又貴國ニ於テ此等ノ品

物ヲ製スル材料ハ皆貴国自ラ産スル所ナレ故
国ニ於テハ此等ノ材料ハ皆歐洲ヨリ輸入ヲ仰
カサル可カサルノ不利ヲ被レリサテ貴下貴国ニ
於ケル贖籍ハ如何向後書翰ヲ^呈シタク又拙
女ノ製造ニ係ル品物ヲモ呈上シタケルハ願クハ
教示セヨ

余乃チ其任所ヲ名刺ニ認メ之ヲ予ヘテ曰ク茲ニ長
時間殿下ヲ留メテ繁務ノ妨害ヲナスノ恐アレハ今
日ハ之ヲ拜辞スル事トナシ重テ再會ノ期アラニテヲ
希望ス殿下幸ニ自愛セヨ

外曰余モ亦深ク再會ノ期ヲ希望シ且ツ貴下カ海
路ノ安全ナランニテ祈ル——茲ニ一礼ヲ施シテ馬

車ヲ驅リ宿所ニ帰ル

以上ハ凡テ外務大臣トノ談話ニ係ル故ニ其意見ハ
即チ其局ニ当レル專任者ノ言ニシテ又当国一般
ノ意向ト認ムルモ決シテ不可ナキカ如シト虽
比尚ホ進テ暹羅国在朝在野ノ主ナル人物ノ意向
如何ヲ考察スルニ外務大臣ト同シク進テ我國ト
條約ヲ訂結センニテ希望スルモノ、如シ左ニ主ナル在
朝在野ノ数氏ト談話中日暹條約ノ條件ニ係ルモ
ノ、之ヲ摘記シテ其証左トス

第一前外務大臣シロマタ公閣下トノ談話

余曰閣下ノ前ニ外務大臣タリシ時ニ当リ諸歐洲

各國ニ對スル政略ノ主義ヲ承ルヲ得ハ幸甚
公曰其主義ニ至リテハ一言以テ之ヲ蔽フヲ得ヘシ即
チ國ヲ開キ文明ヲ進ムニ在リニ三十年前ニ於テハ
敵國中歐式ノ家屋ハ勿論電信鐵路等ニ至ルニテ
一モ見ルコトヲ得サリシカ今日^又往時ト同シカラス又輸出
物等ハ嘗テ無カリシニ今日ニ至リテハ米及^チチ
材ノ輸出等モ莫大ノ額ニ達シ為メニ敵國ノ
富ヲ増加シタルヲ信スルナリ又諸歐洲各國ト條約
ハ全ク余カ各國公使ト訂結シタルモナリ
余曰貴國ト敵國ト條約ヲ訂結スルニハ今日ヲ以
テ好時期ナリト思考ス閣下ノ意見如何
公曰拙老モ亦貴見ニ同シ

余曰貴國政府或ハ國民若シクハ或一朋黨ニシテ兩國
間ノ條約訂結ニ反對ヲ試ムルモノナリヤ
公曰拙老ハ決シテ之無キヲ信ス蓋シ敵國ニ於テハ
工下共ニ貴國ニ對シテハ好意ヲ表シ居レナリ
第二暹國前ノ攝政ノ秘書官タリシ英人ヒックス氏ト
ノ談話
氏曰余カ攝政ノ秘書官トシテ親シク知ル所ナリカ怡
二十年前ニ於テハ當國人士ハ日本國カ歐洲化スルノ
甚シキカ為メ甚ク輕蔑ノ意ヲ生ヒシカ今日ニ於テハ
一變シテ暹國ハ防禦的ニ攻撃的ニ同盟ヲナサント欲
スルノ傾向アルヲ見ル然レモ此同盟ハ一方ニ傾キタ

凡同盟即チ暹国ハ日本ノ餘力ニ浴スルヲ得ヘキ
モ日本ハ之ニ反シテ暹国ノ助力ヲ得ル能ハセルノ
同盟ナレハ決シテ成立シ難カラシ暹国ハ今日外國ノ
助ノ下ニ國ヲ保護セントスルハ甚々難事ナリ唯
同國ノ取ル可キ政治ノ方針ハ各國ニ向テ若國ト
ノ訂結條約ニ從ヒ誠實ニ之ヲ履行スルノ外策アラ
サル可シ

暹国政海ノ朋黨——同國ニ於テハ朋黨多シト
虽此概言スルハ二派ニ分ツテ得ル即チ老誠ナ
ル朋黨ト我國現時ノ所謂才子流ノ朋黨ト
ナリ而シテ今ノ現内閣ハ此才子流ノ政權ニ
掃セリ又第一ニ掲ケタル「クロマタ」公ハ即チ老誠

派ノ首領ノ地位ニ立ツ人物ニシテ嘗テ当王陛下
カ幼年ヲラセラルニ當リ其叔父之カ攝政官タリシ
此攝政ハ非帝ノ寡傑ニシテ百難ヲ排シテ同國
ノ國是ヲ定メリ而シテ「クロマタ」氏ハ當時身外務
ノ重任ヲ負ヒ暹羅ノ開國ニ其力ヲ致ス
方カリシ第一ニ掲ケタル英人「ピックス」氏ハ此攝
政ノ秘書官タリシヲ以テ現内閣ト反對ノ位置
ニ立ツモノナリ而シテ其朋黨ノ意見ハ即此兩
人ノ意見ヲ以テ全班ヲ推ス
一ヲ得ヘシ故ニ茲
ニ二人ノ談話ヲ載セテ現政府ニ反對者ノ意
見如何ヲ示ス

第三陸軍次官(氏ハ陸軍次官トシ陸軍大臣ハ当主陛下ノ實弟ニシテ虚名ヲ擁スルニ過キニ實推ハ同氏ニ帰セリ故ニ其権力ハ陸軍大臣ト異ナリ所ナシ)デージョト氏トノ談話

軍事上ノ談話終テ後余氏ニ向テ曰願クハ我東洋諸国ト互ニ相信ニ相結ンテ共ニ歐人ノ跋扈ヲ抑壓スルノ機會ヲ得ニテ望ム貴意果シテ如何

氏曰貴下ノ意見拙見ト全ク符節ヲ合スルカ如シ余曰敝国ト條約ヲ訂結スルニ就テ貴意如何

氏曰之レ兩國ノ大慶事ナラン然レ此其義ハ外務大臣ニ詳細ノ談話アリテ如何

ヲ受ケ且ツ此件ニ関シテ實ニ満足ナシ返答ヲ得タリ然レ此貴国執政官各位ノ意見ヲ確メシカ為メ貴下ノ意見ニ即カント欲シタルナリ

氏曰敝国ノ内閣員ハ貴国ト條約ヲ訂結スルニ就テ一人モ反對者ナキニシカ皆大ニ希望スル所ナリ

第四文部大臣バスカラウオングシト公トノ談話
公曰貴国ノ領事館ヲ当府ニ設ケラルノ運ヒニ至ル可キヤ

余曰拙者ハ一ケノ漫遊者ナレハ敝国政府当局者ノ意向ノ如キハ之ヲ知ルヲ得サルモ其ハ領事館ヲ設

立スルヨリモ寧ロ公使館ヲ設ケタキ考ナリ然ルニ

領事館若シクハ公使館ヲ設ケルニハ順序トシテ其以前ニ兩國間ノ條約ヲ訂結スルノ必要ナルヲ見ル今日東洋ノ形勢上ヨリ觀察スルバハ必ス東洋ノ同盟ヲ計ルニ必要ヲ感ス此時ニ於テ貴國ト敝國トハ速ニ通商條約ヲ訂結シテハ如何

公曰十分ノ協議ヲ遂ケタル後ニ非サレハ不可ナリ然レハ兩國間ノ條約訂結スル大體ニ就テハ亦シモ異議ナシ

余曰ク願クハ貴國ノ民法及刑法ノ一部ヲ惠マレタシ

公曰現今敝國ニハ制定サレタル法律ナシ以前ノ法律ハ縮旬ノ未寇ニ由テ散乱セシヲ以テ現ニ探索編

纂中ニ在リ

余曰貴國ニ於テ法律編纂中ナリト聞ク果シテ信ナリヤ

公曰然リ始メハ貴國ノ如ク佛蘭西法ニ倣ヒ編纂ノ目的ナリシモ東洋諸國ニ於テハ風俗習慣ヲ異ニシ殊ニ宗教ノ一点ニ至リテハ西洋各國ト其趣ヲ異ニスルヲ以テ印度ノ法律ニ摹倣シテ現今編纂セリ蓋シ印度ハ宗教モ同シク佛教ナレハナリ

余曰何ノ時ニ於テ其編纂ヲ終ルノ預定ナレヤ
公曰今後一年以上ノ歲月ヲ要スルナラン第一ニハ犯罪法ハ編纂ニ着手セリ

余曰現今支那人ハ貴國ノ法權ノ下ニアリヤ

公曰然り支那人ハ支配者ノ誰彼ニ就キテハ必シモ
傾着セサル性質ヲ備ヘタル人種ナリ

余曰歐洲人ハ如何

公曰彼等ハ貴国ニ於ル如ク流外法推ヲ有ヒリ其為

メニ種々ノ困難ヲ感スルヲ多シ

余曰條約ノ期限ハ已ニ年限ヲ過キタルモノト信ス

而シテ貴国諸條約國ニ何テ條約改正ヲ試ミ

ラレタル事アリヤ

公曰條約ハ實ニ不完全ナレド、(詔ハ已ニ絶

チクシ共其意ハ改正ヲ申込ムモ却テ今日ヨリモ

切込マル、ノ恐レアルヲ以テ自ラ之ニ甘スル

モノ、如シ)

余曰流外法推ヲ指シテ不完全ナリト称セラル、カ威
ハ又他ニ不完全ナル條件アリヤ
公曰通商ノ点ニ於テモ亦之レアリ

第五暹羅国政府顧問官伯耳義人ジャクソン氏トノ談

話

明治二十七年四月十二日氏ハ余ヲ逆旅ニ来訪セリ

氏曰ク貴国移民ノ企アルヲ聞ク之レ果シテ信スルカ

余曰之ヲ唱道スルモノ又之ニ從事セント欲スルモノ

考キカ如シト虽モ未タ今日確定シタルモノ

ニアラス

氏曰何故ニ貴国ハ当府ニ領事館ヲ設ケサルヤ

余曰某ノ考ニテハ領事館ヨリモ寧以公使館ノ設
置ヲ適當ナリト信ス

氏曰若シ貴下ノ言ノ如クナラハ一層可ナラン且ツ詔ヲ續
テ曰ク某ハ歐洲強國ノ衝突ハ英魯ニアラシテ却テ
英佛ノ葛藤カ此東洋ニ越テ起ルナラント想像ス
殊ニ佛國カ東亞細亞ノ小弱國ニ對スル所置ハ
不正不理然ント言詔ニ絶スル程ナリ此際ニ於
テ亞細亞ノ諸國即チ貴國及支那暹羅ノ三国
カ相提携シテ相救援スルノ必要アリト信ス

余曰ク余ノ考フル所モ亦然リ
氏曰ク近日ノ内ニ宴會ヲ開キ外務大臣其他ノ人
ニ紹介ヲナスノ考ナレハ今日ハ外務省ニ出勤ス可

キ時間廻リタルハ別ヲ告ント互ニ一礼ヲ施シテ分ル
明治二十七年四月十六日——即チ氏カ宴會ヲ催シタ
ル日——氏ヲ室ノ一隅ニ拉テ曰ク数日前ニ外務
大臣ト數時間ノ懇話ヲ得テ遂ニ敝國ト條約訂
結ノ事ニ及ヘリ外務大臣ヨリ其件ニ就テ何トカ
貴下ニ諮詢セラレタルコトアリヤ

氏曰與ニナシ然ルニ余ノ考ニテハ今日兩國間ニ
條約訂結スルハ果シテ得策ナルヤ否ヲ疑フ
余曰先日貴下ハ敝國カ当府ニ公使館ヲ設クル
事ヲ賛成サレタルニ今兩國間ノ條約訂結ヲ
不可トセラルノ理由ハ余強ント解スル能ハサ
ル所ナリ其理由如何

氏曰治外法権ノ問題ニ如何セハ可ナラン是レ實ニ憚ル可キ問題ニシテ此問題ノ為メニ兩國ノ感情ヲ害スルニ至ルモ知ル可カラズ
余曰已ニ其^箇條一就テハ協議整ヒ外務大臣ハ日本國ニ向テ治外法権ヲ讓與スルヲ議セラレタリ

氏曰現今當國ノ法律才判ノ現状ヨリスレハ勿論貴國ニ治外法権ヲ讓与セサル可カラサルノ實アリ然レモ余カ已ニ政府ノ依托ヲ受ケテ法律ノ編纂中ナリ故ニ余ハ今日條約ヲ日本ト訂結シテ治外法権ヲ与ケルノ件ハ外務大臣ニ於テ再考アラシメテ勸告スル積ナリ然レ

余ハ顧問官ノ位置ニアルヲ以テ外務大臣ニ於テ容レラルト容レラサルトハ今日ニ於テ知リ難シ——氏ハ獨ニ佛國ト葛藤ヲ生シタル際ニ開戦ヲ政府ニ勸告シタリ蓋シ開戦スルニ至レハ英國ハ必ズ之ヲ援助ス可シトノ考ナリシモ開戦後英國ノ助ヲ得ル能ハス其結果甚々不良ナリシ為メ當時ニアリテハ大ニ外務大臣ノ信用ヲ失ヒ其言ノ容レラサルモノアルノミナラス或ハ外交上ノ問題ニ就テハ諮問セラレサルモノサヘアルニ至レリ今日ニ於テハ法律編纂專務ナルカ如キ顧問アリ故ニ此言ヲナセルナル可シ

余曰外務大臣カ日本ニ治外法権ヲ讓与スルハ東

洋諸国カ互ニ相信シ相接クルノ實勢ヲ歐洲
諸国ニ示スニアリトノ意ナリシ
氏曰貴説此ノ如クナレバ其治外法權ヲ讓与スルカ
或ハ讓与セリルトカヲ論スルモノハ却テ互ニ相信
ルサルニ由ルモノナラスヤ
余曰小利ヲ捨テ、大利ヲ共ニセントスルノ意ナレハ
必シモ貴説ノ如クナルノミナラサルベシ
氏曰此件ハ本年九月頃ニテ、当国政府ニ提出セ
スレテ、延期スル、下ニシテハ如何蓋シ余ハ本
年九月頃ニテハ日本ヲ訪問ス可キ預定ナ
レハ其際互ニ條約ヲ訂結セハ却テ完全ノ條
約ヲ結フヲ得ン日本行ノコトハ已ニ外務大臣

ニモ其意ヲ通シタリ
余曰法律編纂終局ノ後ナルヤ而シテ氏ノ答ナカ
リシ
此ニ注意ノ為メニ氏ノ畧歴ト意思アル所ヲ
概言スレハ氏ハ嘗テ白耳義国ノ内閣員ニ
列シ屢万国公法會ノ議長ニ舉ケラレタル位ニ
テ一時歐洲政治社會ニ其名ヲ知ラレタル
程ナリシカ後テ會社事業ニ手ヲ下シ一敗地ニ
墜リ身代限ノ處分ヲ受ケ漂泊シテ埃及ノ
カイロ府ニ逃レ居リシカ偶然暹国今ノ外
務大臣カ歐洲漫遊ノ途次埃及ニ於テ相會
シ遂ニ攀ケラレテ顧問官トナリシモノナリ故ニ

岡氏ノ意思ハ暹國ノ國利ヲ計リ國權ヲ振張
セシメテ企ツルヨリモ寧以自身ノ囊裡ヲ肥
サントスルニテリ故ニ其為ス所ハ唯一小功名
ヲ樹テ、為メニ雇用ノ年月ヲ長クセントノ
策ヲ取レリ前陳ノ本年九月頃マテ條約訂
結ノ申出ヲ延期セシメテ勸告スルカ如キ最終
ノ問ニ向テ答テカ如キ以テ其真意ノ在ル
所ヲ知ルニ足ル可シ故ニ我國ハ彼ノ方策ニ罹
ラサルヲ努メサル可ラス即チ彼ノ策ハ九月
頃ニ到レハ現今着手中ナル法律編纂ノ大部
ヲ終ル可キヲ以テ其法律ノ効力ヲ示スノ機
會ヲ求ルル時ニアリ故ニ若シ此法律完成ヲ

口實トシテ我日本トノ條約上ニ海外法權
ノ條件ヲ除クヲ得ハ氏カ岡國ニ勸メテ編
纂シタル法律ノ効力ヲ顯ハスヲ得ヘシ即
チ氏カ編纂シタル法律ニ由テ暹國ノ一步
ヲ上進セシメタルモノナレハ其功ニ依テ
暹羅ノ歡心ヲ得其雇用ノ年期ヲ延ハサン
ト欲スルニ過キス

（Faint, illegible handwritten text in a grid format, likely bleed-through from the reverse side of the page.)

速ニ日暹條約ヲ訂結ス可キ六理由

以上ニ列記スル外務大臣其他在朝在野ノ有力
家ノ談話筆記ヲ一讀スルモ、ハ必ス暹羅國カ
我國ノ申入ヲ承諾スルハ勿論彼ヨリ進テ我邦
ト條約ヲ訂結セン丁ヲ希望スルヤ明白ナリ且
ツ其條約ノ條件ノ如キ決テ我國權ヲ侵害ス
ルノ恐レナキノミナラス却テ暹國ヲシテ十分
ノ讓與ヲナサシメ大ニ我國權ヲ振張スル丁ヲ
得寧口暹羅國ニ向テハ可憐ノ情ヲ起ス可キ点
ニ至ル迄我ニ利ナルノ條約ヲ訂結シ得ベキ丁
尤ヲ見ルヨリモ明ナリ夫レ機ノ来ル速ニシテ
去ル亦速ナリ而シテ九百ノ事機ニ投スレハ功

ヲ奏シ易ク機ヲ失ヘハ功ヲ成シ難シ而シテ此
時機ナルモハ治眼ノ士ニアラサルヨリハ之
ヲ視ル能ハサルナリ蓋シ機ノ奪スル迅速ニシ
テ且ツ玄微ナレハナリ余熟暹國ト我邦トノ通
高條約ヲ訂結ス可キ時機ヲ考察スルニ内外ノ
事情ト東洋ノ大勢上ヨリ之ヲ視ルモ蓋シ今日
ヲ外ニシテ他ニ好機會ナキヲ信スルナリ先ツ
同國ノ内狀ヨリ詳察シ来レハ同國ノ如キ國體
ニ於テハ如何ナル所ニ其國ノ政權ノ歸スル
カ又其國民ノ性質如何ニ就テモ深ク顧慮セザ
ル可ラス乃チ暹羅國ハ世人ノ熟知スルカ如ク
專制國ニシテ其國ノ施政ハ全ク國王一人ノ

意見ニ由テ左右セリ而シテ古来此專制國ノ常
情トシテ一國ノ政治上ニ中樞ヨリ及ホス力多
キニ居リ從テ其政權ノ外家ニ歸スルハ專制國
ニ於テ多ク見ル所ナリ今暹羅國ニ於テ誰カ最
モ勢力アルカヲ問ハハ人皆現任外務大臣ノ右
ニ出スル者ナキヲ答フルニ躊躇セズルモナカ
ル可シ然シテ同大臣カ果シテ暹羅國ノ政權ヲ
左右スルニ足ルノ實力アリヤ否ヲ問ハハ夫レ
テ然ラス一個年少才子ノ政治家タルニ過キス
而シテ斯ノ如キ權柄ノ歸シタル所又ノモハ
獨リ外戚ノ因縁アルカ爲メ而已乃チ同國ハ旁
一第ニノ兩皇后アリ而シテ其ニ今ノ外務大臣

ノ實妹ニ屬ス故ニ外務大臣ノ意見ハ宮中ヨリ
入りテ一度國王陛下ノ命令トシテ奏スル中ヨリ
則テ如何ナル有力家ト雖モ未シテ之ト争フ丁
能ハサルナリ之ニ由テ之ヲ見レハ以上ニ列記
シタル外務大臣トノ談話ハ全ク行ハレテ條約
上好結果ヲ見ルヲ得ヘキハ又明ナリ而シテ之
ヲ行フニ人現任外務大臣ノ在職中ニ成テセサ
ル可ラス蓋シ其政權ノ帰スル所以ハ上述ノ如
キ外戚ノ故ニ由ルヲ以テ若一朝國王陛下ニシ
テ諱ハアルカ如キ事アラハ其政權ハ果シテ誰
ノ手ニ移ル可キヤ蓋シ同國人ト雖モ豫知スル
能ハサル所ナリ況ンヤ外人ニ成テオヤ而シテ

現國王陛下ハ未タ四十僅ニ一ヲ加フルニ過キ
サルモ聖体病弱ニシテ近日ノ如キ已ニ病床ニ
成テ日ヲ送り政務ハ亦殆ント措テ顧ミタルニ
至ル故ニ何ノ時ニ成テ故アルモ計リ知ル可カ
ラス然ラハ則テ現王不幸ニシテ仙逝ノ後ハ今
ノ皇太子殿下ハ現任外務大臣ノ外甥ナルヲ以
テ或ハ續キテ其政權ヲ專ラニスルヲ得ルモ知
ル可カラスト雖モ蓋シ此一事ハ同國ノ事情ヨ
リ考察スル中ハ頗ルニ足ラサルナリ是レ速ニ
日暹條約ヲ訂結ス可キ理由ノ第一ナリ
次ニ同國顧問官タル白耳義人口ーラン[○]ジヤク
ミン氏ハ已ニ前述ニ明ナルカ如キ人物ニシテ

殊ニ彼ノ真意ハ亦前述ノ如クナレハ彼ノ野心
ハ全ク其編纂ニタル法律ヲ以テ我邦ヲ利用シ
テ己ノ功ヲ立テントスルニ在リ而シテ熟、惟フ
ニ假令一步ヲ讓テ同氏ノ草案ニ成レル法律カ
稍完成シタルモノヲ得タリトスルモ決シテ兩
国間ノ條約上テ外法權ヲ除キ我人民ヲシテ彼
ノ支配ニ一任スルトハ到底爲シ能ハサルノ事
ナリ然ル片ハ此法律案ニシテ若シ脱稿スルニ
至レハ彼ニ口實ヲ與フルニ至リ非常ノ面倒ヲ
生スルニ至ルヤ疑ナシ且ツ今日ニ於テハ此ジ
ヤクミン氏ト雖モ我邦ニテ外法權ヲ讓與セザ
ルヲ得サルヲ承認セリ之ニ由テ之ヲ見レハ彼

カ法律案ノ脱稿ニ先テ訂結セザル可ラズ是レ
速ニ日暹條約ヲ訂結ス可キ理由ノ第一ナリ
現國王陛下ハ上述ノ如ク聖体不豫勝ニテ現ニ
盤谷府ヲ避テゴーンシンチャン島ノ離宮ニ靜ヲ養
ヒ居ラル、位ノ有様ナレハ何時不豫ノ變ニ遇
フモ知ル可ラズ而シテ一朝現王陛下カ仙遊セ
ラル、後ハ政權爭奪ノ變亂ヲ生ス可キハ今
日誰モ豫期スル所ナリ然ルニ此内亂ニシテ果
シテ起ルニ至ラハ暹國政府ハ同國居住外人ノ
生命財產ヲ保護スルノ力ナキニ至ルハ疑ナシ
若シ果シテ外人ノ生命財產ヲ暹國ノ力ヲ以テ
保護スル能ハサルノ徴ヲ見ハ英佛ハ之ヲ機ト

之テ内乱ノ政策ニ関涉ヲ始ムルニ至ルハ實ニ見易キノ道理ニシテ又他ノ各国モ共ニ手ヲ内政上ニ下スニ至ラン之レ安南、東京、東浦寨等ノ滅亡皆其内乱ニ乘シテ内乱ニ関涉シ遂ニ其國ヲ強奪スル佛國ノ筆法ナリ何ソ獨リ暹國カ其覆轍ヲ踏マサルヲ得ンヤ且ソ外國人ノ内乱ニ関涉ヲ始ムル機會ノ如キハ前述ノ如ク其國民ノ生命財產ヲ保全スルトノ名義ヲ以テスルノミナラス必ス暹國各朋党カ已ノ位置ヲ得シカ為メニ外國ノ力ニ依頼セントスルモノ生シテ口實ト好機會トヲ彼等ニ與フルハ又數ノ見易キ所ナリ現ニ今王ノ時内乱アルニ際シ第一ノ

國王カ難チ英國公使館ニ避ケ其保護ヲ求メタルカ如キ其例ナリ然ラハ則チ我國ニ亦テモ其不吉ノ變起ラサルニ先チ同國ト條約ヲ訂結シテ敏腕ノ公使ヲ派遣シ置キ且ソ其變ニ遭遇スルトモアラハ其間ニ処シテ同國燒眉ノ急ヲ救ヒ同國ヲシテ安全ニ國家ヲ維持セシムルカ或ハ進テ彼政人ヲシテ獨リ利ヲ斷断セシメス我國モ亦其利ニ與ルカ免モ角同國ノ安危ノ關スル所ハ我邦人ノ袖手對岸火災視ス可キモノニ了ラズ是レ速ニ日暹條約ヲ訂結ス可キ理由ノ第一ナリ

若シ又幸ニシテ國王ノ不豫全快セラレタリト

スレハ現今同国ニ於テ非常ナル秘密ヲ以テ定
メタル外交ノ方針ハ歐洲各國ニ巡遊シ國王陛
下自ラ暹国ノ局外中立タルトヲ宣言セラレン
トスルノ計畫アリ本年ニ於テモ不豫ノ事十カ
リセハ直ニ實行セラレ可キ豫定ナリ云々二豎
ニ臨マカレラレタルカ當ノ遠ニ延期ニ乘リシ
ナリ而シテ今日同国ト通商條約ヲ訂結セルノ
国ハ十二ニシテ早キハ千八百二十六年ニ英國
ト條約ヲ訂結シ最後ノモノニ於テモ千八百七
十年ニ西班牙ノ條約ナリトス而シテ同シク東
洋ニ國ニテ利害ヲ共ニスルノ我邦ニシテ今日
ニ至ル迄同国ノ條約國中ニ列セザルハ自ラ東

洋ノ先進者ヲ以テ任スル我國ニシテ歐洲諸国
ニ對シ實ニ慚愧ノ至リナラスヤ然ルニ之ニ反
シテ同国ト我國位ヲ辱メサル條約ヲ訂結シ置
ク中ハ歐洲ニ對シテ面目ヲ施スノミナラス又
我國ヲ歐洲其他全世界ニ廣告スルノ好機會ヲ
得ルニ至ルモ未タ知ル可ラス殊ニ外交家ノ熟
練如何ニ依リテハ同国王ノ巡遊ヲシテ第一ニ
日本ニ乘ラシメ第一ニ我國カ同国ノ局外中立
ヲ認メテ之ヲ他條約同ニ扱ハスルニ至ラハ我
國カ東洋ノ霸權ヲ握ルヲ得ルモ亦東洋開明
ノ先進者トシテ他ニ慙ル所ナキニ至ルハ知ル
可キナリ殊ニ同国ニ對シ一等優國ヲ以テ條約

ヲ新結ニタルヲ歐洲各國ニ示スハ實ニ我國
權ヲ振張スルニ於テ大効力アルモノトス是レ
速ニ日暹條約ヲ新結ス可キ理由ノ第一ナリ
昨年采佛國トノ境界論ヨリ遂ニ戰端ヲ開クニ
至リ其葛藤ハ今日ニ至ルモ未タ結了セズ佛國
ト益不正不理ノ請求ヲナセリ而シテ同國カ四
周ヲ瞥見シテ外援ノ國アルヤ否ヲ視ルヤ一モ
己ノ危急ヲ救フ可キノ友國ナキヲ見ル可シ即
チ支那ニ依頼セシカ前年附庸國タルト否トノ
議論ヨリシテ遂ニ同國トノ關係ヲ絶チタルハ
今日ニ於テ自ラ危急ニ陥ルタリトテ俄ニ首ヲ
低フシテ其救ヲ求ムルヲ能ハス又英ニ依ラン

カ前年英國カ其保護國タラントヲ勸告セシニ
當リテ之ヲ作ケタルカ為メカ駐暹ノ英國公使
ハ暗ニ暹國政府顧問官ハ暹國ヲ助クルノ約ヲ
ナシタルニモ拘ラズ同國ノ急ヲ援ケズ同國今
日ノ狀態ハ怯モ大病者カ單身病床ニ卧シテ一
人ノ訪問者ナキニ異ナラズ然ラハ此時ニ當リ
テ有形無形ヲ論セズ同國ニ同情ヲ表スルノ友
國アルニ遣ハハ彼ノ感動ハ果シテ如何ソヤ必
ズ外交情ノ擧キヲ感シ我義俠ノ深キヲ謝スル
ナラン而シテ此様ヲ失フテ暹佛ノ高藤蒸着ノ
後ニ於テ條約新結ヲ申入レシカ彼國情ヨリ推
セハ求シテ我國ヲ重セサル可シ故ニ是非共此

兩國ノ葛藤著者セサルノ今日ニ當リテ條約ヲ
訂結セサル可ラス是レ速ニ日暹條約ヲ訂結セ
サル可ラサル理由ノ第五十リ
近來我邦人ノ暹國ニ注意スル者多キヲ加フル
ニ至リ現ニ殖民其他ノ志望ヲ抱キテ渡暹セシ
モノサヘアルノ今日ニ於テ速ニ條約ヲ訂結シ
テ我人民ノ不法ヲ制限スルト同時ニ我國權ヲ
擴張セサル可ラス然ラサレハ無條約國タルノ
故ヲ以テ遂ニハ兩國人民間ニ錯謬ヲ生シ彼國
人ニ向テ我國ノ威儀ヲ失フ事ナキトモ限リ難
シ且ツ同國ノ國情常ニ變シ易キ性質ナレハ今
日我國ニ向テ同國人ノ表スル好意ハ長ク保テ

得ヘキヤ否ハ甚々疑シキ点ナリトス況ンヤ彼
等ノ感情ヲ害スル如キ事件ノ條約訂結セラレ
サル以前ニ或リ起ルアルカ如キアラハ忍テ彼
等ノ歡心ヲ失フテ今日ノ如キ好果ヲ奏スル條
約ハ到底再ヒ結ビ得サルニ至ルヘシ是レ速ニ
日暹條約ヲ訂結ス可キ理由ノ第六十リ
以上列陳スル六ヶ條ノ理由ニ由テ見レハ速ニ日
暹條約ヲ訂結ス可キ必要ヲ發見スルニ苦マサ
ル可シ而シテ之ヲ訂結セントスルニ當リテ其
目的ヲ妨害セント試ミルモノハ第一英佛兩國
旁ニロトラン、シヤクミン氏ナル可シ而シテ英
國佛國ハ各其自國ノ為ニシテシヤクミン氏ハ其

一身ノ利害ノ為メニスルナラン然レトモ敏腕
 ノ外交家ニシテ其局ニ当ラハ決モテ其妨害ハ
 恐ル、ニ足ラサルナリ又條約訂結後ノ東方政
 策上暹國ニ對スル方策ノ如キハ別ニ腹案ノ備
 ハルモノアリト雖モ今之中附記也ス

(Blank page with vertical lines)



一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、